

イシモヅクとクサモヅクとは同一物である

稲垣 貫一

「石に着くのがイシモヅク、草の上ではクサモヅク」というのが兩種の外観的の區別の要點とされているが、それは着生物だけの相違であり、種々な文献を辿つてみてもはつきりした區別がつかない。手近かな處で岡村金太郎先生の日本藻類圖譜第2巻及び日本海藻誌の記載によれば一應兩種の概念を把握することが出来るが *Chordaria* 屬そのものの性状がはつきりしない以上なんだか解けぬものを感じるのである。併し順序としてこれ迄邦産イシモヅクの特徴とされている主な點を列記すると『体は辿り得られる中軸あり、互生又は叉狀に3~4回分岐、若いものは多枝、老成すれば小枝を失う。枝は開出、雁木狀に屈曲、粘質に富み、体の軟いもの、硬いもの等種々な段階がある。内部構造は髓部と皮部の同化糸の層とから成り、前者に於てはその内層は長い圓柱狀の細胞から、外層は放射狀に配列した短い圓形又は多角形の細胞から出來ていて何れも細胞は厚膜、髓部は諸所中空となつている』これに對して同じくクサモヅクの方ではイシモヅクに比較して『中軸がはつきりせず各方面に分岐、髓部は最初から中空で甚だ廣い、内腔の周圍に細い圓柱狀の細胞が存在、單子嚢は同化糸の基部細胞上に着生、軟質である。』つまりイシモヅクとクサモヅクとの間の最も著しい相違は外観的には分岐の點、構造の上では中空形成の時期及び廣さ等である。然し邦産のイシモヅクは GEPP の原記載により査定されたものであるが、その基準標本は現在 British Museum の腊葉庫に所藏されている唯1個のものに過ぎず、その寫生圖は山田先生のもとにあるので同先生に見せて貰いたが分岐が疎である。我々は GEPP の原記載を土臺にした岡村先生の記載に基いて多型的なもので体が比較的硬く岩石に着き、所謂辿り得る主軸を有するという枠でイシモヅクを決定し、深處に生育し、他の海藻に着生、辿り得べき主軸がはつきりしないで、質の軟いものはクサモヅクの方に入れたのである。尤も KYLIN によれば岡村先生の邦産クサモヅクは KUETZING 命名のものとは異つているという。兎に角この程度の外部形態と内部構造の検討では兩者の概念がどうもピンと來

ない。従来此等兩種の出典として次のものをあげることが出来る。

イシモヅク *Chordaria firma* GEPP, Chinese mar. Alg. (Journ. of Bot., Vol. 42, 1904) p. 162, Tab. 460 figs. 7-8; OKAMURA, Icon. of Japan. Alg. vol. III, 1915, p. 183, pl. 143, figs. 1-9; pl. 145, figs. 1-9.

クサモヅク *Chordaria Cladosiphon* OKAM. (non KUETZ.), Icon. of Japan. Alg. vol. III, 1915, p. 188, pl. 144, figs. 1, 2, 4; pl. 145.

ところで1940年 KYLIN の *Phaeophyceenordn. Chordariales* が刊行され、劃期的な *Chordariales* の分類が發表せられてここに *Sphaerotrichia* なる新屬が設けられた。此の屬が成長點と同化糸の頂端細胞の形態の點で *Chordaria* 屬とは全く異なるということを肯定せしめるに至つたのである。海藻の様に性状が簡單であるが形態が多様なものに當該種の様なものは今迄の程度での分類方法では充分とは

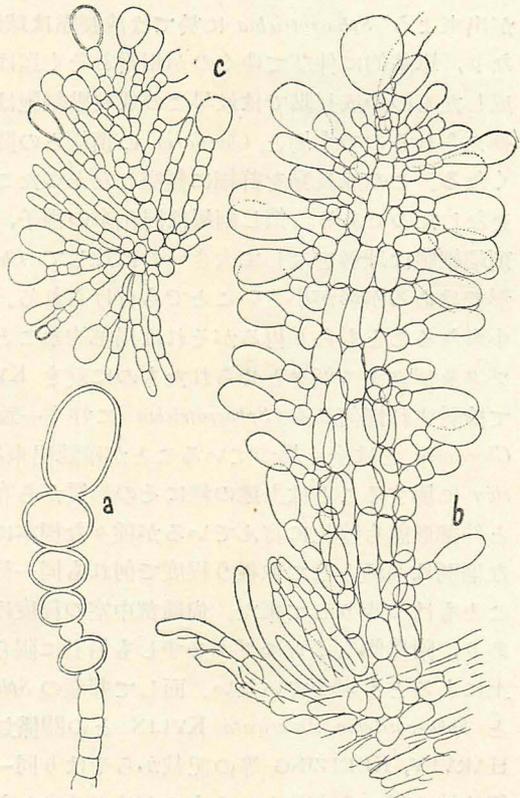


Fig. a

イシモヅク *Sphaerotrichia divaricata* (Ag.) KYLIN f. *typica* INAGAKI の成長點及びその下位の中軸の一部、室蘭、貝殻上 ×285

Fig. b

同上イシモヅクの着生根部附近より生じた幼体 ×225

Fig. c

ヤセモヅク *Sphaerotrichia divaricata* (Ag.) KYLIN f. *epiphytica* INAGAKI の幼体、忍路灣フシスジモクの体上 ×190

いえない。それ故に KYLIN の分類は正に暗夜に燈火を得たものと言うことが出来よう。° *Sphaerotrichia* に於ては成長點は球形の細胞が1~3個念珠状に連なり、單基的に伸びてゆくのが相當おそく迄はつきりと指摘される。尤も老成したものの成長點では最早この成長點細胞は見られなくなり、同化糸に置換えられるので本屬と *Chordaria* の頂端との間には何等の相違が認められなくなる。この成長點を詳細に觀察しなかつたことが從來兩屬間の混亂の要因をなしたのである。然し兩屬は同化糸の様子、特に *Sphaerotrichia* の同化糸の頂端細胞は球形をなして大きいのに比して *Chordaria* の場合は倒卵形又は球形ではあるが形が小さいことでも分けられる。往々兩者の頂端細胞が何れも小形なることもあり得るがそれは局部的なことである。これ迄邦産のイシモヅク及びクサモヅクとせられたものに就き KYLIN がとり上げた形質によつて検討すれば何れも *Sphaerotrichia* に好く一致し、その發生過程を見ても *Chordaria* とは全く異つていることが確認出来る。此等兩種が共に *Sphaerotrichia* に屬することは上述の様にその形質から容易に背かれ、且つは内部構造と外部形態も變化に富んでいるが種々な標本により比較研究すれば、その様な區別は品種として取扱う程度で何れも同一種として考えた方が穩當であることもはつきりして來た。尙髓部中空の程度は体の部分により種々な段階があり、附着物もイシモヅク必ずしも岩石に限らず、クサモヅク常に他の海藻上にあるとも定つていない。而して邦産の *Sphaerotrichia* に屬する上記のものと *Sphaerotrichia divaricata* KYLIN との関係如何というに KYLIN を初め HARVEY, KUEZING 等の記載からやはり同一種と見るべきであるが唯基本種は辿り得べき中軸というものがはつきりしない様であり、邦産のものでは此の中軸を指摘することが出来るけれども往々それが不明なものもあるから斯様な點を種の特徴としない方が好いと思われる。既に遠藤吉三郎先生も自らの採集品に對し *Sphaerotrichia divaricate* (AG.) KYLIN の異名である *Chordaria divaricata* AG. を用いていられたことは東京大學所藏標本に依つて明かである。

Sphaerotrichia japonica KYLIN は KYLIN の、岡村先生の海藻圖説による命名にすぎず、今邦産のイシモヅク及びクサモヅクが同種で *Sphaerotrichia divaricata* KYLIN に當てることとしたからには此の種も亦基本種に包含さるべきものである。以上の見解によりイシモヅク、クサモヅクその近似種を集めて *Sphaerotrichia divaricata* KYLIN に當て、更にそれを幾つかの品種に分けたが、その詳細は近刊の北大海藻研究所の歐文報告に譲ることとする。

(北海道大學理學部海藻研究所)